

HIMALAYA

ヒマラヤ
No. 197



1988 APRIL



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

日本ヒマラヤ協会

HAJ登山隊員募集

— 世界最高峰 —

チョモランマ北壁

HAJでは、カンチェンジュンガ（1981年）、K2（1985年）と世界三大峰に足跡を残し、それぞれに成果を上げて来ましたが、いよいよ最高峰に挑戦することになりました。世界の最高峰は、南北共に登山申請が殺到しており、許可取得も困難になっております。HAJの仲間でこの最高峰を舞台に素晴らしい登山を展開し、今後への可能性を試みようではありませんか。

記

時 期 1989年8月15日～10月31日

ル ー ト チョモランマ（中国側）北壁

登山方法 参加隊員のレベルに合わせて幾種類かの方法を組み合わせる事もある。

負 担 金 150万円

資 格 ・冬山登山経験5年以上のHAJ会員。

・高所登山経験者（未経験の方は高所登山に準じる国内登山経験を有する方）

申込み先 HAJ事務局まで

〆 切 り 1988年5月31日

隊員決定 実行委員会にて決定

表紙写真

ラブチェ・カン山群を南側から撮影した素晴らしい写真が「世界の山々Ⅱ」（白水社刊）に載っている。ピラミダルの主峰を守るかのように東にドッシリと構えているのがこの7,100mの無名峰である。これはその北面の雄姿。（ラブチェ・カン偵察隊）。

ヒマラヤ No.197

-
1. 冬期バルトロ氷河偵察 ————— 飛田和夫
-
14. ヒマラヤニュース <地域ニュース・インフォメーション>
-
16. ヒマラヤ登山入門 インド・ヒマラヤ編(10)
-
21. FESTIVAL OF INDIA JAPAN 1988③
-
24. 寸感・事務局日誌
-

冬期バルトロ氷河偵察

飛田和夫

はじめに

1985年8月6日、吹雪の荒狂う中をK2のピークに背を向け、C3(7,400m)から下降を始めた。3年余の企画から実践の中で、16名が高みを求めての行為であった。私自身はK2の威風堂々とした三角錐の8,611mの高みに立ちたくて隊長として遂行した。一応隊としては16名中3名がピークに立って成功したが、私は立つ事が無く'85年のK2は終了した。

再度K2に行きたい。ピークに立ちたいと云う願望は打ち消される事なく、より一層強いものとなって燃えあがってきた。もう一度K2へ、どうせ再度行くなら違った時期に行ってみよう。と云うのが冬期K2への発想となった。だが、冬期となると並の考えや行為ではなすすべもないだろうと云う事は容易に判る。ネパールが冬期登山を解禁してから次第に冬期登山隊の数も多くなり、貴重な資料も出されてきているが、カラコルムとなると少く、さらにバルトロ氷河に至っては全くと云っていい程無に等しい。

冬のスカルドはどうなのか、アスコレはどうなのか、当然ながらバルトロ氷河の様子などは予想もつかないのが現状である。

冬期K2に向う前に、冬期の各地域の様子を知らなければならないし、即冬期K2に向う事は余

▲冬期バルトロ氷河に行くポーター

りにも私達には不遜に思える。先ずそれらを解決する為に冬期バルトロ氷河に入る必要があり、冬期又は秋期にK2に近い位置で8,000m峰に登る必要も出て来た。3年程を費やして再度冬期K2に向う構想も組み立てられた。構想が芽ばえても構想にあった実践が遂行出来なければ意味がない。その為に私は昨年から自由の身になった。

冬期K2の第1段階として、私と熊田の2名は冬期バルトロ氷河への計画を進め、'87年12月4日成田を発った。9日にはスカルドに降り立ち、13日に最奥の村アスコレにテントを張った。さらにバルトロ氷河を歩き、12月26日に目的地のK2のBC(5,200m)に到達出来た。冬期K2国際隊と同じ年と云う事でラッキーな面もあったが、それだけでは冬期K2に、冬期バルトロ氷河は解決出来ない事も体験して来た。

出発前に「無意味な事だ」、「何故偵察を」、「スカルド、アスコレは寒くて、雪が多くて…」、「冬のバルトロ氷河なんて行けないだろう」等々の言葉を聞いたが、全ての事はやはり行ってみなければ解明できなかった事であったし、今回の偵察によって冬期K2登山の可能性も自分の目で見、身体で感じてくる事が出来た。

イスラマバード～スカルド

12月4日、11時30分のPKで成田を発ち、20時

30分（現地時間、時差4時間）にイスラマバード空港に到着した。乗客が少ないので、かなりオーバーした機内預荷物も早々に受取り、通関は簡単な口答で済む。早々に出迎えに来てくれていたシルク・ロード・ツアー・サービスの督永さんと逢う事が出来た。車に満載しシルク・ロードに入る。他の客の為に近くのシャハラザール・ホテルを予約しておいていただく。

翌5日、官庁関係は休み（金・土の週休2日制）なのでシルク・ロードで持参した装備・食糧とデポ品の整理をおこなう。ポーター支給品として督永さんより種々提供していただく。夏期あのクソ暑さは無く、太陽の陽射しの下では半袖、日陰に入ると上着が必要になる程で、体を動かすには最適の気候だ。途中で我々のガイドとなるモハメッド・アリ氏（'85年のK2の時にウルドカスで会い、その後もBCまで肉類を運んでもらっていた人だった。）から連絡が入るが、冬期K2国際隊の第2次隊は11月上旬にバルトロ氷河に入るが、ウルドカス付近でポーターは帰ってしまい、その後ヘリコプターを使用している。ウルドカスの積雪は40~50cm、アスコレも雪との事。第3次隊は12月11日頃にスカルドを出発、ポーターには完全装備支給でポーターを確保しているらしい。我々のポーターはどうなるか？ポーターの確保が難しいらしく、以前より元気の無い話し方だ、と督永さんが伝えてくれた。

夕方、今年、東洋大の連絡官としてK2に行ったシアア・カーン氏が来る。9日に日本に行くとの事だった。彼には、HAJの冬期K2遠征の時は連絡官をしてほしい旨伝える。彼としても冬期K2にはかなり興味をいだいている様子だ。そして、'85K2の時にお世話になった高橋氏（弘前大OB、在イスラマバード）が手に飲物を持って来てくれる。

6日、外国人登録後に観光省にて情報収集（来年の日本隊は13隊に許可で、私が隊長を務める秋期ガッシャーブルムII峰の許可は、トレッキング終了後に渡すと云っていただく。）その後、シルク・ロードにてガイドのモハメッドと会うが、冬期K2国際隊はポーターが集まっていない。我々の方は集まるかどうか心配だ、という様子で彼に

個装の支給をしていますが、今ひとつ元気がない。ガイドと別れた後、ポーターに支給する為の羽毛服をホリディー・バザールで何とか調達、15時過ぎに在パキスタン・日本大使館に行き、'85年の時にお世話になった鷺原氏に面会、ヘリコプター使用に関する誓約書にサインをしていただく。今年は日本隊で2件の死亡事故があったと心労を話され、私達にも十分気を付ける様にてとご助言をいただく。

バルトロ氷河のトレッキングは制限ゾーン（詳しくはヒマラヤNo.191参照）になる為に、ガイドの同行が必要になり、ガイドとポーターの保険、ヘリコプター使用時の誓約書（以前にトレッキングでヒスパー氷河、バルトロ氷河でヘリコプターを要請したが、要請者が死亡したり、連絡不明になったりしていたので、それらを防止する事もある様子）と、外国人登録、ガイドに個装の支給を済ませ、観光省にトレッキングの申請を行ない、許可取得後にブリーフィングを行なう、登山隊と何ら変わるところがない。東部カラコルムでの対インドとの紛争からも、同地域に入る場合は一段と厳しくなったという話しも聞く。

ガイドには、保険の契約とトレッキング許可申請を依頼する。冬期の場合になると保険会社も一社に限られてしまう。

適当な気候は行動をスムーズにさせ、一日にかなりの仕事がこなせた。夏期には到底考えられない今日一日の仕事の収穫だった。

7日午後には、ラワルピンディーに行き、モハメッドと3人で不足しているポーターの羽毛服とケロシン・ストーブの購入。8日には許可を取得し、ブリーフィングを行なう。許可は一ヶ月間で、ポーターの支給品はどうかとガイドが聞かれていた。その後、モハメッドと打合せしポーターの個装を再点検するが、これではウルドカスまでだろうとか、だが、モハメッドはポーターが集まっているかどうかの方が心配の様子であり、我々にも判る。

我々とすれば、とにかく許可は取得した。ポーターが集まらなければ、まずスカルドでアスコレまでのポーターを集め、アスコレでは、ハージ・マディーン氏に頼み、入れる所まで。どうしても無理な時はバイユまででも、その後は態度と

2人で登山の原点にかえり、K2 BCまで行こうと云う気持は日本を発つ時からあったので我々には動揺のかけらも無かった。いずれにせよ12月は寒気は厳しくとも、積雪はあまり無いだろうというのが私自身の安易な考えなので降雪によって身動き出来なくなることは少ないだろうと思っていた。新聞に冬期K2国際隊の記事が載っていた。

4日間で順調に準備を終え、9日には、7時にイスラマバードを飛び立ちスカルドに向った。席の都合でファースト・クラスに座った我々は出された朝食もそこそこに席を立ち、右手のナンガ・パルバットに食い入った。ナンガより若干高目の高度からの眺望は、ディアミール側から北面へと全容が望める。ルパール側は見えなかったが、左側の窓には、ヒンズークシュからフンザ、さらにバインター・ブラック、ラトック山群、K2、ブロード・ピーク、マッシュャブルム等の山々が確認される素晴らしい景観だが、アッという間に下降に入ってしまう。もう少し飛行時間がほしいところだ。下降を続けていくと、見覚えのあるスカルドとインダスの大河がせまって来る。スカルドを囲む山々には雪があるもののスカルドとその付近には雪は見えない。ポプラの木立は葉を落とし、回りの岩と砂に同化するがごとく土色に見え、寒々とした感じを受けざるを得ない。冬のスカルドに來た、という実感がわく。寒いだろうと心の準備

をしていたが機外は心の準備とは同一ではなかった。空港に集まる人達の姿を見ると厳しい時期ともおもえない。後を振り返ると、すでに飛行機の回りには機を背にした軍人が、銃をさげて立っている。シアチェン氷河での交戦を物語っている。

小型トラックに荷を積み、ホロのかかった荷台に乗り街に入るが、体がすっかり冷えてしまう。路面には雪、氷は無いが、左右の水たまりには氷が張っている。街の中心部に入る手前のフンザ・イン・ホテルに入る。先は、スカルド入りした。

ポーター確保の件が一番心配だったが、夕方には7名が来るという。モハメッドも我々もホッとする。モハメッドの事務所はスカルドが拠点らしく、そこからの連絡なのだろう。モハメッドは7名のポーターが夕方来ると伝えると共に、イスラマバードでの弱気はすでに無くなり生々としてきた様子だ。そして種々手配に動いている。

熊田と2人でバザールの下見に行く。「スカルドは雪だ」「非常に寒い」「バザールはほとんどやってない」といった出発前に多くの人達から聞いた言葉だった、が、どうだろう。街中には雪は無く、太陽の下では暖かく、バザールは裏道まで開店しており、道は所々ぬかっているが、往交う人達は多く活気にあふれている。まわりの山々は真白に輝き冬を印象づけている。バザールで目に



▲機上から観る冬のナンガ・パルバット (8,125m)

つくのは冬の為か、身につける物が多い。中には日本の何々中学校と氏名を付けたままのジャージの上下がかなり出回っている。夏期と変わらないのは、女性の姿が全くないことだろう。途中で'85年K2の時のアシスタント・サーダーと会った。彼も11月に冬期K2国際隊でウルドカスまで入ったので様子を聞く事が出来た。

翌10日は7名のポーターに個装(シュラフ、羽毛服、ジャケット、ジャージ上・下、セーター、帽子、登山靴、スパッツ、手袋、靴下、サングラス等)の支給とアドバンス賃金の支払い。その後、食糧、ケロシン等の購入を済ませ、11日には出発出来る事になった。ポーターが確保されれば他は何ら問題になることはなく、順調なスタートになりそうだ。

冬期K2国際隊がスカルド入りしたというが、会う事がなかった。フンザ・イン・ホテルには国際隊のハイ・ポーターとなるフンザ地方の人達がかなり滞在している。スカルド、ダッソー付近のポーターは冬期バルトロ氷河には入りたくない様子なので、フンザ方面から呼びよせている。

スカルドは朝、夕の気温が5~7℃、日中太陽が出ていると、太陽の日射しを受け、ウトウトとするのには丁度良い。太陽が沈むとそうはいかないが。室の中は寒く、朝は中々ベットから離れられない。

K2 BCを目指して

12月11日 スカルドー(ジープ)ーボルジョ

7:00 +6℃ 曇り 2,250 m

(高度計の指示は、東京での高度をそのままにしておいたので、目安としてほしい)

スカルドの街はずれのガソリン・スタンドでガソリンを入れたジープ2台は、ガイド1名、ポーター7名、隊員2名と隊荷を積み出発する。インダス河を渡り、広大な砂地を突切り、シガール河が望める峠に達する。'85年夏には、岩と砂とシガール河の流れだけの中にも点在する緑があったが、今は一点の緑も無く、河は雪と氷で白く、どんよりとした天候が寒さと、もの淋しさを一層加味させている。疑いも無く冬の景観だ。入山前の緊張をさらに強くさせられる。

シガールの寒い食堂で甘いティーとゆで玉子の昼食、付近にはやけに氷が目につく。わずかな家並をはずれると、枯れた草、木を休む間もなく食む牛・羊がせわしく動いている。ジープはシガール河左岸を走り、やがてシガールの流れから別れてブルラルド河になるとダッソーに着く。村の中の立派な橋を渡ると'85年の時にキャラバンをスタートさせたレストハウス。ダッソーの村の中にも雪は無い、どんよりとした雲はすぐ上まで漂い雪線はかなり下っている。ダッソーから先、以前の高捲の始まった地点の少し先に、これも立派な橋がかかっている('85年の時は帰路、一本のワイヤーロープと籠が下がっていた)文明の力はさらに奥まで我々を運んでくれる。左岸の車一台がやっとの道路は、以前よりもかなり整備され工事中の橋もあった。対岸上部には高まきルートが見える。今後はもう通ることもないのだろうか。

やがて細長い一軒の家(4~5軒に仕切られており、2~3店が入っている)と、道路を挟んで畑が広場になった地点にジープが停まる。そこがボルジョというらしい。ダッソーから歩いて3時間程だろうか。

スカルド~ボルジョ(ジープ賃)

小型、1,000 PS 中型、1,200 PS

(レート、12月7日、1ドル=17.37 PS)

広場にテント3張を設営、ガイド、ポーターで2張(冬天)、隊員1隊(夏)、再度隊荷の計量をするがもう1名が必要になり、手配をする。

16:00 +7℃ 曇り 2,580 m

18:00 +4℃ 晴(星空) 2,580 m

12月12日 ボルジョ~ホトン

6:00 0℃ 曇り 2,630 m



▲冬期バルトロ行はポーターの支給装備も大きな問題である。

キャラバン・ルート概念図



7:00 - 2℃ 曇り 2,630m

昨夜は満天の星だったが、今朝はどんよりとした曇り空。6時30分頃より明るくなる。

昨日アレンジしたポーターが来ないので分散する(ポーター、25kg/1人、ウルドカスまで。ウルドカス以降は20kgとの事)。後日オーバー分を賃金で支払うことにする。我々2人も早々に25kg程を背負う事になり、キャラバンはスタートした。

ブラルド河を流れる水流は夏期よりかなり少なく、対岸の人達は河を渡ってこちら側に来る。道路は続き、ポプラ並木さえも岩や砂で出来ているのかと思われる程に、緑を失っているチャボ村を対岸に見、やがてボルジョ・ゴンという所で休憩、岩の回りにキャンプの跡が残り、辺りには平坦な畑が広がる所。'85年帰路にビバークした場所だが、夏期はここまでジープが入るといふ。スカルドからジープで入り、建物も何もないここまで来て、飲料水はブラルド河の水を用いる事になるのだろうか。

道路はさらに続き登りきった付近でブラルド河に、向けて小道を下降する(2,860m)。ブラルドの流れが一番狭くなった所に橋がかかっている(2,730m)。対岸の右岸を登る。夏期登山の場合、入山時は水辺の近くをわずかなアップ・ダウンを繰り返しながら行けるが、帰路は2ヶ所程かなりの高捲をさせられる。水流の少ない今は、時々水を利用しながら水辺を行ける。途中で昼食、彼等からロティーやティーをもらう。今回の食糧は、ガイドのモハメッドがポーターと同じ食物と量で済む事が出来、人数が少ないので行動はほぼ同一行動

となるので、行動中に我々の方からビスケットやアメを配り、昼食時は彼等から貰う様なスタイルになる。

12:00 +3℃ 曇り、時々小雪が舞う。

岩と砂の中の行動中にも、所々の小さな流れには氷が付き、ツララが下がっている。ブラルド河の流れの中、水しぶきがかかる岩には氷の帽子さえも見えてくる。

チョンゴ手前の高捲はしない。今日の宿泊はホトン(HOTO)とモハメッドが言う。高捲をしない、ホトン泊という事は、ブラルド河を渡る必要がある。行ってみると、やはり高捲の必要は無く高捲地点の少し先に橋が見える。水流の少なくなる12月頃より橋をかけるという。いずれにせよ高捲をしなくてすむのはポーターにとっても、我々にとってもラッキーなことだ、重荷のザックではなおさらの事。

対岸の畑の中程を河に沿って行くと、高捲途中から望める立派な建物が2軒在る付近にテントを張る。一軒は病院で、もう一軒は学校という。この場所にと首をかしげる所だ。16:40着。

18:00 - 4℃ 晴(星空) 2,900m

いよいよマイナスの世界に入る。ポーター達は今夜も外で火を焚き食事をしている。

12月13日 ホトン→アスコール

6:00 - 7.5℃ 晴(星空) 2,850m

7:00 - 7℃ 晴 2,850m

今朝は晴れているからだろう寒気が厳しく感じる。昨夜は寒さの為かポーターの声がいつまでも聞こえていたが、早くから火を焚いている。太陽

の日射が無いと仲々動きたくないが8:35出発。運動靴ではすぐに足がジンジンとしてくる。

再度橋を渡り、しばし登るとチョンゴ村の畑の一角に立ち、太陽の恵みを受けると全身が生き生きとする様だ。畑と葉の落ちたポプラの木立、家々、働く人々の姿があり、遠くに雪煙のたなびくマッシュルームが望める。

チョンゴ 9:35 -0.5℃ 晴 2,960 m

牛、羊は枯れた草を食み、人々は畑の中の土か肥料なのか小さな背負いに入れて運搬している。雪は山々にあるのみ、のどかな風景だ。

チョンゴ村の先には温泉が在る。約3,000 mの雪を抱く山々にかこまれたこの温泉は、ぬるくとも今までのほこりを払い、気分さえも和らげてくれる。だが気分さと共に筋肉をも和らげてしまい重荷がグッとこたえてしまう。アスコーレまでも道には雪は無く、回りの山々は白く輝やいている。冬のエベレスト街道の様だ。

アスコーレでは村に入る手前の広場に1張のテントを設営し、熊田と入る。モハメッドとポーターは村の中へ、専用の室があるらしい。村人が何人かづつテントをのぞきに来る。羽毛服を着た人、コフラックスの登山靴を履いた者もいる。村長のハージ・マディン氏宅に行ってみるが不在だった。アイベックス(野生羊)を撃ちに行ったとの事。

夕方、モハメッドが来て、現在精製されたアタが無く、明日精製するので明日休養日にしてほしいと連絡に来る。パイユの休養日と変更にするという。OKにする。

18:00 -6℃ 晴(星空) 3,050 m

12月14日 アスコーレ(停滞)

6:00 -11℃ 晴(星空) 3,010 m

7:00 -10℃ 晴 3,000 m

今日は片岡君の「結婚を祝う会」。日本までの時差を考えると、もうソワソワしているだろうなと2人で笑い合う。「オメデトウ」の電報をうったつもり……にする。

ハージ・マディン氏が来る。私を覚えてくれた様子。彼の家を誘われ、昨日獲ったというアイベックスをいただく。

12:00 -0.5℃ 曇り 3,000 m

今回もアスコーレの村の中を歩く。家の作りや

生活の場所を考えると、冬期と云えども積雪はそれほど多くはないように思えてくる。

18:00 -1℃ 曇り(所々に星) 3,010 m

冬期K2隊が追付いてくるのではないだろうかと思っていたが来なかった。モハメッドが話していたポーター確保に苦労しているのだろうか。

12月14日 アスコーレ→コラホン

6:00 -6℃ 高曇り(月がぼんやり)3,030 m

7:00 -4℃ 曇り 3,020 m

昨日もそうだったが5:30に祈りの声。再計量するとどうしても7名では無理で1名増やす。デポ品をハージ・マディン氏宅に依頼し8:40発。村人達はすでに、畑へ土運びに働いている。ブラルド河の右岸を進み、夏期の高捲は、氷を利用しながら水辺に沿っておおきく回り込むと、ピアフォー氷河舌端が目に入る。雪は付いていない。ピアフォー氷河から流れでてくる河の両岸は次第に氷が多くなり、途中から氷を利用して対岸に渡る。高捲を何回かパスしたり、氷を利用して近道したり、冬ならではのことだろう。

12:00 +1℃ 曇り 3,000 m

ピアフォー氷河の舌端をおおきく回り込んで行く。波打つ氷河の奥には、ガスの中に岩峰が望める。ピアフォー氷河からパスを越し、ヒスパー氷河をも歩いてみたい。

やがて今日の宿泊地で、大きな岩のあるコラホンに着く。14:30。前方にはデュモルド河との分岐とバリユデュマン方面が続いている、山々は白く、すでに日陰になっているので寒々としている。

18:00 -4℃ 晴(星空) 3,065 m

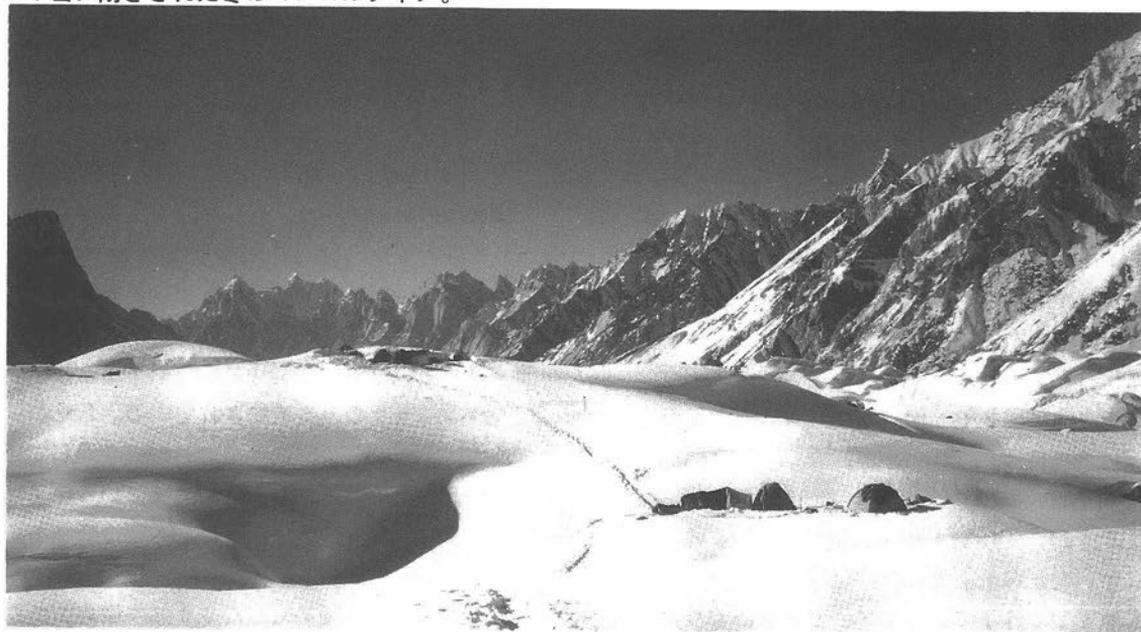
羽毛の下着(上・下)を着る。

12月16日 コラホン→スカンボ・チョコ



▲たちまち足の感覚がなくなってしまう冬のデュモルド河の渡渉。

▼雪に閉ざされた冬のコンコルディア。



6:00 -6℃ 曇り (三日月がぼんやり)

7:00 -5℃ 曇り 3,080 m

今日も出発は8:40。6時に起床としているが寒さの為に遅くなってしまふ。早目に出る事は無理だろう、寒すぎる。

デュモルド河の渡渉は夏でさえも仲々のものだが、今日の渡渉は流れの兩岸に氷が付いているので氷を踏みつけてから流れに入るため、氷を踏むだけで感覚がなくなってしまう。膝付近までの水量。

バリュデュマン手前で昼食とするが、太陽が顔を隠し、河下から微風がくるだけで身震いする。

12:00 0℃ 曇り 3,160 m

河の右岸の水辺をつめて行くが、水は夏とは違い澄んでいる。夏のあの色、あの濁りをおもうと、今の澄んでいることが想像出来ない。水量は少なく、水色に光る氷が多くなってくる。

先頭を歩いていたポーターが振返って、後者に歩みを止める様なジェスチャーをしている。ソールと前方を見るとアイベックスが5~6頭斜面を登っている。と、銃を持って来ているアスコレからのポーターが銃を片手に持ち、反対側から登って行く。かるやかな身のこなしで行く。それらのながれを望観していると、アスコレの山奥でなく、全く異次元の世界にいるのではないかといった錯覚にさせられてしまふ。銃の音はなかった。

わずかに行くと、小さなキャンプ・サイトでスカンボ・チョコという。

15:00 +2℃ 曇り 3,240 m

18:00 -2℃ 晴 (星空) 3,240 m

ポーター8名を含む11名は、人数も少ない事もあるが、すでに1つの隊の様で、お互いにキャンプ・サイトの整地や設営を手伝ってくれる。そして、ロティーやティーを運んでくれる。

12月17日 スカンボ・チョコ→パイユ

6:00 -9℃ 晴 (星空) 3,220 m

7:00 -9.5℃ 晴 3,215 m

雲が多くなってきた8:35頃に出発。ルートは夏期とは違いはぼ水辺通し。途中ヘリコプターが低空飛行で行くが国際隊のメンバーの様子だった。軍のヘリコプターは、毎日の様に飛んでいる。

河原から推石丘状を越して行くとバルトロ針峰群が目に入ってくる。さらに右岸の河岸段丘を行くと、針峰群と長大なバルトロ氷河、さらに広大になるブラルド河が一望出来る。バルトロ氷河は黒々として、積雪はなさそう。バルトロ氷河が望める所まで来る事が出来た。左手のパイユは夏の緑は無いが、木立が確認出来る。

一担、河原に下り、澄んだ水辺の端を歩き、パイユに上る手前で、ハダカになり体を拭く。

12:30 +5℃ 晴 3,370 m

頭上には青空が広がっているが、右岸山側の上

空には黒い雲がずっとおおったままだ。パイユは緑の葉は完全に無いが、夏同様に岩と砂の世界を歩いて来ると、やはり安堵感を覚える。水の心配をしていたが流れは氷の事が無かった。やけに牛が闊歩している。

15:00 +5℃ 晴 3,410 m。右岸に雲。

ポーターの今後の主食となるロティーを焼くのにこれからでは時間が無いので、明日停滞してほしいと言ってくる。モハメッドと話し合うが結局は休日とするしかない。

18:00 -3℃ 晴(星空) 3,395 m

12月18日 パイユ(停滞)

6:00 -12℃ 晴(星空) 3,350 m

7:00 -13℃ 晴 3,340 m

寒い朝になる。こんな時は木・草・岩・砂さえも凍てつく様子で、歩いていても砂ぼこりはたたない。ここも雪は無かった。

朝食後、不調を訴えていたポーター頭が、パイユまでと予定していたアスコレ・ポーターと下降していった。

一人で散歩に行く。パイユのBC方面へ登って行く。バルトロ氷河の波打ちが婉々と伸び、針峰の間に三角形のムスタグ・タワーとブロード・ピークの独得の山容が望めた。

12:00 +5℃ 晴 3,350 m

15:00 -3℃ 晴 3,360 m

テント内でゴロゴロしていると、ポーターが何人か上って来た。国際隊が来た様だ。彼等はいつに来た。ポーターを確保し行動する事が出来たのだろう。

ポーターは自分達の寝場所を決め火を焚きはじめ。隊員は樹林帯の手前にテント設営している。夕方、ザヴァダ氏に逢いに行く。高所ポーター、隊員が忙がしく動いている。真赤な羽毛服を着た隊員の中に隊長のザヴァダ氏がいた。我々が入っている事は知っていた様子で快く対応してくれた。熊田の通訳で何とか話しが出来た。話しの最後にコンコルディア、K2 BCは-20℃以下になるし積雪も多い。装備は大丈夫なのかと聞きながら、我々2人の頭から足先まで見て心配の様子だった。

18:00 -7.5℃ 晴(星空) 3,360 m

国際隊のポーターは、いつまでも火を焚き話し声が聞こえていた。

12月19日 パイユ→リリゴ

6:00 -13℃ 晴(星空) 3,330 m

7:00 -13℃ 晴 3,315 m

国際隊のポーターは、ウルドカスまで行くアスコレとダッソー付近の人達約150名。ウルドカス~BC間のピストンを行なうフンザ方面の人達60名程との事。前者は夏の支給品、後者はハイ・ポーターという事で個装一式を支給するらしい。現在はシュラフのみを支給されている。したがって前者のポーターはシュラフ無しで夜を過している。一晚中火を焚きながら話し合っている様子だ。又、彼らは、我々のポーターにどの位の賃金を払っているのかと聞いてくる。

太陽がテントを暖めだした9:00に準備開始し、10時に出発。国際隊は休養。

氷河舌端 11:30 -1℃ 晴 3,320 m

バルトロ氷河のガレ場のアップ・ダウンを繰り返す。前方にはトランゴ・キャシードラル山群が青空の下に突き上げている。トランゴ・タワー岩峰も望める。夏と同じように雪はあまり付けていない。氷河を横切り、左岸をつめて行くと次第に雪が現われはじめ、ガラ場の下のカンプ・サイト、リリゴに到着した(15:00)。

15:20 -8℃ 晴 3,650 m

わずかな太陽の陽射があるうちに、寄贈していただいたポーター用シュラフの撮影をする。太陽が沈むと同時に急激に気温が下ってくる。テントに入りラジウスを焚かない事にはどうしようもない。明朝の出発までテントの中に入ったきり、毎日がこの事の繰り返しになってしまう。

18:00 -11℃ 晴(星空) 3,640 m

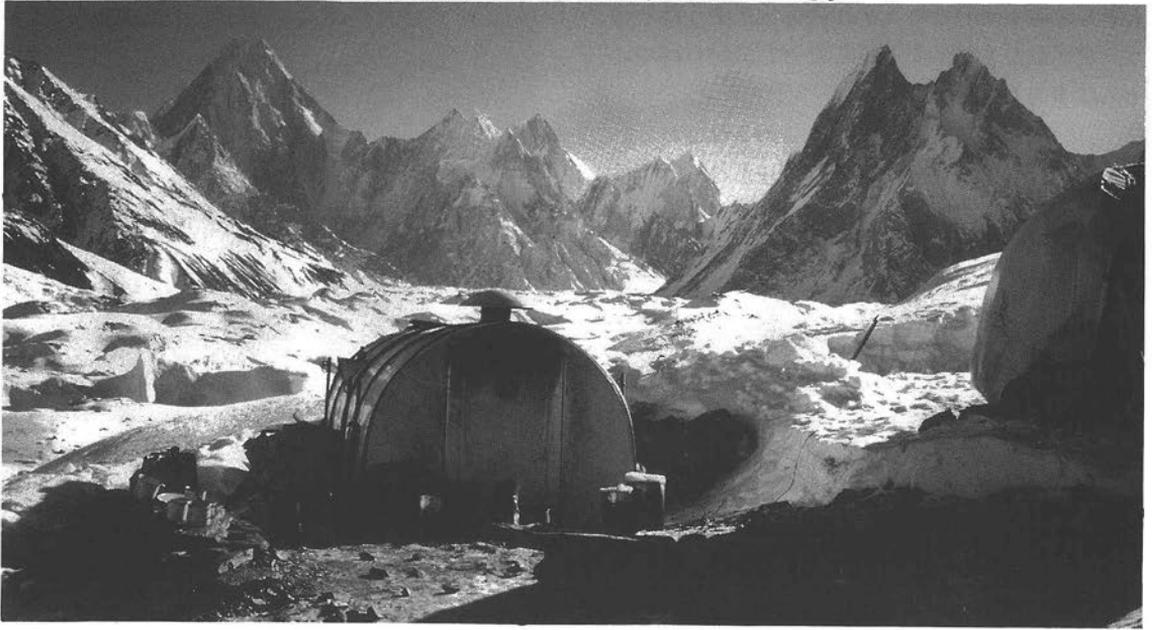
12月20日 リリゴ→ウルドカス

6:00 -18℃ 晴(星空) 3,630 m

7:00 -17℃ 晴 3,630 m

日照時間の少ない場所は気温が上らないのだろう。今朝はあっさりと-15℃を切ってしまう。9時に出発する。太陽はまだまだだ。さらにウルドカスまでは氷河と左岸の中間部を辿るが、ほとんど太陽の恵みは無し、歩きながらも寒さを感じる。積雪は少しづつ増すが足元は運動靴。寒く冷たい

▼バルトロ氷河上にはパキスタン軍のシェルターが3ヶ所設けられている。



一日になった。

12:00 -13℃ 晴 3,810 m

前方には、ブロード・ピークやGIVが見えてくる。歩くのがうんざりしてくる頃、ウルドカスが見えてきた。夏期のテント場は雪の斜面に変わっている。その下に国際隊のテントが数張あり近づくに隊荷がかなりあって、ヘリポートも作られてある。まだ約1,200kgあるという。

お茶を御馳走になり、その付近に我々もテントを張る。

18:00 -18.5℃ 晴(星空) 3,930 m

とにかく寒い所だ。一日の日照時間が30~40分程度だと、常駐している国際隊の隊員が話していた。

12月21日 ウルドカス(停滞)

6:00 -25℃ 晴 3,930 m

7:00 -24℃ 晴 3,920 m

アッという間に-20℃の大台に乗ってしまい-25℃を記録してしまった(国際隊の記録によると-27℃との事)。隣りのポーターのテントではほぼ一晩中ラジウスの焚く音と話し声が聞こえていた。寒いのだろう。スカルドでの話しではウルドカスからは3名のポーターがその後も行く事になっていたが、ここまでも実際に行ってみなければ判らないだろうと考えていた。さらに3名がウルドカスから先も行くと言う話しだったが、最悪の事になるかも知れないと頭にあった。その答が

出たのは、我々のテントを撤収しデポ品をまとめている時、3名の内、2名は不調なので下降したいと云われる。9時頃でも気温は-20℃位はあるだろう。登山靴を履いても手、足はジンジンとしている。これから先は積雪も加わり一層厳しい条件になろう。不調で降りたいというポーターに強くは言えず、お礼を言って、握手を交す。

いよいよピストンをしながら行動すべきかと考えているとモハメッドは、今日、国際隊のポーターが上って来るので降りるポーターの中から2名探すので今日は停滞にしようと言う。確実に雇用出来そうな話し方なので停滞にする。

(ポーター賃金)

日当(200PS)+食糧(20PS)+リターン(50PS)

合計 270 PS

休養日 100 PS

12:00 -18℃ 晴(巻雲) 3,930 m

15:00 -16℃ 晴() 3,930 m

夕方、モハメッドが来て結局確保出来なかったとの事。何となくそんな気がしていたので明日からの行動を再検討していた。国際隊はウルドカス入り。

18:00 -20℃ 晴 3,940 m

12月22日 ウルドカス→ピアンゴ付近

6:00 -24℃ 晴 3,945 m

7:00 -23.5℃ 晴 3,945 m

8:30分に撤収していると、フンザのサーダー

と話して降るポーター2名が確保出来そうだと云う。デポ品をまとめたり出したりしながら待つ。そんな事をしている頃、ハイ・ポーターとなるポーターは国際隊より個装一式を支給されている。登山隊と同じ様な装備一式で、俺達もほしくなるような装備だ。結局、ポーターはダメになる。再度デポ品をまとめ、デポ品をザヴァバダ氏に頼み彼等のメステントの付近に置かせてもらう。

ガイド1名、ポーター1名、隊員2名はやっと11:50頃にウルドカスを出発する。氷河の中に入ると太陽の下では暖かい。

12:10 -9℃ 晴 3,960 m

やがて、パイユ、トランゴ、キャッシュドラル、ムスターグ、ブロード、GⅣ、GⅡ、ヒドン・ピーク、そしてマッシュャーブルムのバルトロ氷河を囲む山々が夏期よりグッと近い様に見える。

我々の後から国際隊も行動を開始し、15時頃にテントを設営すると彼等らも同じ様にする。ザヴァダ氏も上って来た。

16:00 -13℃ 晴 4,150 m

18:00 -16℃ 晴(星空) 4,150 m

12月22日 ピアング付近→ゴレ

6:00 -18℃ 晴(星空) 4,110 m

7:00 -18℃ 晴 4,110 m

昨夜は初めて風が吹いていたが今朝はおさまる。8:30に太陽がテントを暖めると行動開始。国際隊より早く9:40に出発するが、ウルドカスからは4名とも25~30kg背負っているので行動は鈍く、国際隊のポーター、隊員の人達と前後しながらゴレに達する。

ゴレ手前 12:00 -7℃ 晴 4,200 m

15:30ゴレ、傾いた太陽と微風は一層寒気を漂わせてくる。軍の基地がある。

18:00 -19℃ 晴(星空) 4,350 m

12月24日 ゴレ→コンコルディア

6:20 -23℃ 晴(薄明り) 4,320 m

7:20 -22℃ 晴 4,300 m

今日も太陽があたってから準備。外に出ようという気持になる。9:40出発するが、ゴレからは完全な雪の世界で、しっかりしたトレースが続いている。昨日同様に、国際隊と前後しながら行動。続く晴天は展望を満喫させてくれるし、行動中は

▼国際隊のA・ザヴァダ隊長と筆者(左)



暖かい。

コンコルディア手前12:20 -9℃ 晴 4,430 m

14時頃にコンコルディアの軍基地に到着。その少し先に我々はテントを設営する。K2BCとガッシャーブルムBCへの基地となる。K2のアブルツィ稜が望める地点だ。国際隊はさらに奥へ入って行った。この付近の積雪は1~2m程ありそうだ。

少し先まで行くと、2年半振りにK2と再会出来た。'85年と同じ様に威風堂々としていた。雪は夏と同じ位に望める。

18:20 -21℃ 晴 4,545 m

明日は計画通りの休養、今までの急に決った停滞でなく気分的にゆっくりする休養日。

12月25日 コンコルディア(休養)

6:40 -22℃ 曇り 4,560 m

初めて寝過してしまう。パイユ方面に黒い雲。全体に高曇り、悪天周期に入るのだろうか。

7:20 -22℃ 曇り 4,550 m

12:20 -12℃ 曇り 4,560 m

18:20 -19℃ 晴(星空) 4,560 m

今後の行動について検討する。当初はガッシャーブルムBC方面、そしてK2BCと考えていたが、ウルドカスからポーターが減った関係で食糧、ケロシンはギリギリになった為、まずは最大の目的としているK2BCを先に行く事にする。K2BCも滞在は最高で2日間となった。

12月26日 コンコルディア→K2BC

6:20 -21℃ 晴(薄明り) 4,530 m

7:20 -20℃ 晴

デポ品を軍の基地に頼み9時出発。トレースは基地より一担GⅣ方面に向い途中で左、右に別れ

ている。右はガッシャーブルム方面で、トレースは軍の人達がつけている様子だ。

左手のトレースに入り、ゴドウィンオースチン氷河へと入って行く。アップ・ダウンのトレースを行くと冬期K2が正面に君臨しているのが望まれる。ルートは氷河の中央モレーンをつめて行く。左、右に氷塔が立ち並んでいる。登るにつれて積雪の量が少なくなってくる。

12:20 - 6℃ 晴 4,720 m

K2、ブロード・ピーク山頂付近からは東方に雲がたなびいている。ブロード・ピークのルート上は蒼氷が光っている。

意外と時間を費やして、黄色のボックス型のテントが並ぶテントと派手なドーム型のテントのある国際隊のBCに到着し、その手前に我々もテントを設営する。15:20。

(気温、湿度等の測定が20分になっているのは、どうも24日から時計が狂った様子。27日夕になって気付く。)

冬期K2 BCにて



▲冬期K2と国際隊のB・C

1) BC入山

12月26日に目的としていたBCに到着したが、スカルドを出発して15日間で入れた事は種々要因に恵まれたからだと考える。

○ポーターの確保

軍の基地がバルトロ氷河上に3ヶ所、ガッシャーブルム方面に2ヶ所設置されており、さらに冬期K2国際隊が入るといふ事で、ガイドも同行をOKしただろうし、ポーターも行く気になったように思われる。

○トレースの使用

上記、軍の移動、国際隊の行動によるトレースを使用することが出来た。

○天候

行動の前半では曇り(上部では雪と思われる)で、後半になって連日の晴天は順調な歩みとなった。

種々の条件が良い方向で重なり、順調に目的地に達せられたのは幸運だった。

2) 国際隊の動き

コックとキッチン3名は、すでにBCに3ヶ

月程滞在しているという。第1次隊荷のデポ品の見張りも担っている様子。

12月25日に第3次隊がBC入りして27日より行動を開始した様子で、27日には早朝に2名、午後2名がそれぞれ上部へ移動していった。

酸素については、医療用として各キャンプに配置し、ファイナル・キャンプとアタックには積極的に使用するとのこと。酸素レスは次の世代へと行っていった。

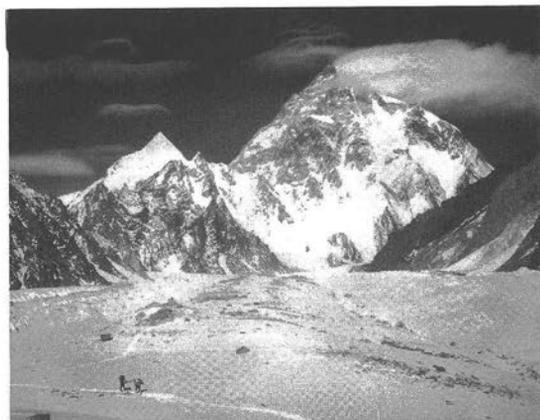
我々はBCに2日間滞在したが、2度の夕食にザヴァダ氏から声がかかり、御馳走になる。まだ全ての隊荷が上っていないこともあろうが、現地食をかなり用いていた。2日間の滞在中、自分自身の語学力の全くない事がこれ程までに腹立だしいことが無かった。ザヴァダ隊長には種々聞きたい事はあったし、何よりも、冬期遠征に向う時の隊長としての精神力をどの様にして養うのかを聞いてみたい事だった。又、冬期エベレスト、カンチエンジュンガが登頂者の人達とも思う存分話しをしてみたかったのだが……。

3) 気温・天気

12月26日	18時	-17℃	晴	4,950 m
12月27日	6時	-20℃	晴(星空)	4,940 m
	7時	-18℃	晴	4,930 m
	12時	-12℃	晴	4,940 m
	15時	-14℃	晴	4,945 m
	18時	-17℃	晴	4,950 m
12月28日	7時	-17℃	曇り	4,930 m

4) BC付近

'85年K2を実施した時に感じた事は、K2BC(5,200m)と南東稜の取付の間(5,500m)にか



▲雲塊のたなびく冬のK2

りの積雪があり、K2南壁面とブロード・ピーク北峰からの雪崩の脅威があるのではないかと考えていたが、実際に行ってみると、積雪は夏期と同じか少ない位であった。偵察に行ってみると巾は狭いが数多くのクレバスがある(国際隊はK2側をルートにしていたが、我々は'85年のルートと同じ様に中央を行く)。素人考えだが、夏期から秋期、冬期にかけて降ったこの付近の積雪は風で飛ばされるのか、それとも、降る量より太陽の陽射で溶けるほうが多いのか、兎も角、この時期は予想したより積雪は少ない。2月~4月にかけての降雪が春期入山を困難にするのだろうか。

5) 気温・風の対応

2日間の短い滞在だったが、この間の気温は最低が-20℃、風は微風のみだった。イスラマバードに戻ってみると、今冬は暖かい。又、日本も並はずれの暖冬という情報が入り、帰国後、今冬ネパールに入った人の情報によると12月中は、ほぼ連日晴天が続き、ジェットストリームも吹かなかったという。

それらを考えると、気温も、風も、種々条件もさらに厳しく対応せねばならないだろう。ザヴァダ氏も烈風は吹くと話されており、1月末にイスラマバードで入った情報によると強い風が吹いているという。

ガッシャーブルム方面へ

12月28日 K2BC→コンコルディア

再度K2に来るとの意志でK2を背にした。何となく疲れ気味でコンコルディアに戻った。天気は下り坂でガスが立込めている。

18:00 -13℃ 曇り(ガス) 4,540 m

残りのケロシンからすると、ガッシャーブルム方面へは2泊3日となる。天気はどうなるか。

12月29日 コンコルディア→シャハリン

6:00 -12℃ 小雪 4,570 m

7:00 -12℃ 小雪 4,570 m

今朝は小雪が降っている。眺望は無い。とにかく行ける所まで行こうと4人で9時20分に出発。K2方面と別かれてアブルツィ氷河に入る。K2方面と同じ様にコンコルディア付近の積雪帯を抜けるとガレが露出してきて、中央のモレーンを進

む。左、右には氷塔が不気味に林立している。

軍の基地シャハリンに到着。2人の軍人が真黒くなっていた。お茶を御馳走するといわれ小1時間程待たされる。もう少し先まで足を伸ばしておきたかったが、天気も悪いのでこの付近に設営。

15:00 -10℃ 曇り 4,780 m

18:00 -11℃ 小雪 4,790 m

軍の狭いアルミ製のドームテントに6人が入り夕食をする。

12月30日 シャハリン(停滞)

6:00 -11℃ 風雪(暗い) 4,850 m

7:00 -11℃ 小雪、強風 4,850 m

昨夜から強風が吹き続けている。準備をして様子を見るが行動をするには無理になる。

12:00 -9℃ 小雪、風 4,840 m

19:00 -10℃ 曇り(月がぼんやり) 4,810 m

今年もいよいよ明日一日を残すのみとなってしまった。最後の一日、何とか天気が回復し、ガッシャーブルムBCまでは無理だろうから、GIだけでも見える地点まで行きたい。今年最後をきっちり締めくりたいと思う。明日はどうしてもケロシンの関係からコンコルディアに下降せねばならない。

12月31日 シャハリン→コーナー→シャハリン→コンコルディア

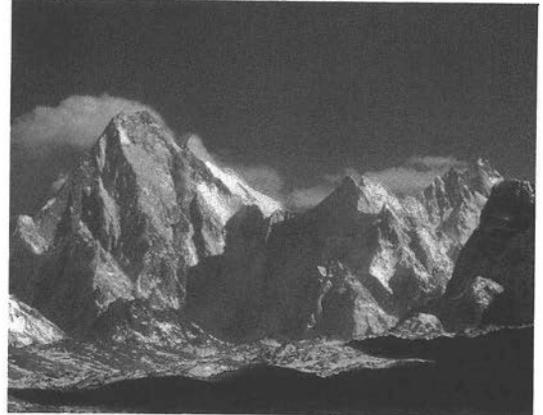
6:00 -10℃ 小雪 4,810 m

7:00 -11℃ 濃いガス・風 4,750 m

天気が悪いが、わずかな可能性を求め、まだ見ぬ冬期GIを求めて、9時頃出発する。我々の強い希望を適えてくれたのかコーナー付近ではガスも動き出し、GIを望む事が出来た。帰路にはチョゴリザの姿も見せてもらう。12時の約束に30分程遅れてシャハリンに戻るが、どうしてこんなに疲労するのかと思う位疲労感を感じる。高度と寒気と風、さらに我々の食糧事情等々の要素があるためだろうか。

コンコルディア付近では完全にトレースがなくなり夕闇がせまる頃にやっとキャンプ・サイトに戻る事が出来た。付近には国際隊のトレッキングチームのテント数張とハイ・ポーター用の大型テントが3張あった。何人かはK2BCへ荷上から帰ってきたばかりだった。

▼冬のバルトロに聳え立つGIV



18:15 -7℃ 雪 4,570 m

K2BC、ガッシャーブルム方面から戻って来た。冬期バルトロ氷河の積雪状態はウルドカス付近より現われ、ゴレ付近から多くなり、コンコルディア付近が一番多い状態だった。K2BCとガッシャーブルム方面に高度を上げるにつれて、次第に少なくなっている様子だった。

帰 路

元旦は悪天の為に停滞となり、翌2日にガスの漂う中を、国際隊のハイ・ポーターと一緒に下降した。我々だけでは、的確なルート・ファイディングにせよ、ラッセルにせよ思うにまかせなかったにちがいないと思っている。又、我々2人はラッセルして行く8名のハイ・ポーターに追いつく事すら出来なかった。ザックの重量も違うがどうもパワーが出ずにまいる、どうも食料事情によりそうだ。

帰路の天候は安定しなかった。回復したと思っても一日で再び悪天になってしまう。わずかだったがパイユもアスコレもダッソーからスカルドにかけても降雪に見舞われた。大雪がドッと降るのではなく連日チラチラと降っていた。1月11日にスカルドに戻った。

冬期K2遠征については、今回の偵察をふまえ、さらに今秋に予定しているガッシャーブルムII峰遠征を終了させ万全の態勢で臨みたい。

(HAJ冬期バルトロ氷河偵察隊1987/88)

隊長 飛田和夫(41)

隊員 能田雅史(31)

ガイド モハメッド・アリ(35)

地域ニュース

《ネパール》

冬期登山隊と10代のヒマラヤニスト

ネパール観光省の発表によると今季のネパール・ヒマラヤ冬期登山（12月1日～2月15日）は、7ヶ国から14隊の登山隊が挑み、そのうち9隊が成功すると云うこれまでにない最高の登頂率を記録した。この好記録について1982年の冬期マナスルから連続6年間冬期8,000m峰登山に出かけ、これまでサガルマータ、マナスル、アンナプルナI峰の冬期登頂に成功している山田昇氏は、「今季は過去6年間で一番の暖冬で、この気象条件の良さが高い登頂率になったのでは。」と語る。

今季、ネパールの冬期登山に入山したのは、韓国4隊、日本3隊、ポーランド、ユーゴスラビア各2隊、アメリカ、カナダ、スペイン各1隊の計14隊。うち、チョー・オユー（8,201m）で最後まで粘っていたスペイン隊（ガリド隊員の単独登頂成功）と韓国隊（断念）がこのほど下山して、すべての隊が登山活動を断念した。

日本の3隊は、「ヒマラヤ」195号、196号で速報した通り、群馬県岳連隊（八木原罔明隊長ら14名）がアンナプルナI峰南壁イギリス・ルートからの冬期初登頂に成功した他、同じアンナプルナI峰に北面から挑んだカモシカ同人隊（大蔵喜福隊長ら4名）は、6,100mで断念となった。また、アンナプルナ南峰南壁を目指した宇都宮白峰会隊（山形正己隊長ら8名）は、雪崩の危険性の為ルートを南西稜に変更したが5,800mで断念となった。

韓国隊は、サガルマータ（8,848m）、カンチエンジュンガ（8,586m）、チョー・オユー（8,201m）、ゴジュンバカン（7,743m）の4隊に挑み、チョー・オユーを除く3隊が登頂に成功した。中でも2月11日にゴジュンバカンの冬期登頂に成功したサミッターは、光云電工高3年の柳光烈（18）、同2年の崔迷鎬（18）両隊員とシェルパ3名だったと云うのであるから驚きである。

、10代のヒマラヤン・サミッターについては、昨秋H A Jと西藏登山協会の合同隊で出かけたラブチュ・カン（7,367m）に17歳の少女、拉吉（ラジ）が初登頂した事を「ヒマラヤ」193号でも紹介したが、今度は10代コンビが7,000m峰の冬期登頂に成功したと云うのである。ヒマラヤニストの高齢化現象が憂えられる日本の登山界にとっては誠に妬ましい限りである。

'88年プレ期の登山隊

2月14日、ネパール観光省は、プレ・モンスーン期の登山許可を17ヶ国の28隊に与えたと発表した。この春はチョモランマ・サガルマータの交差縦走を狙う日本・中国・ネパール合同登山隊と建国200年を記念して同じくサガルマータからチベット側へ縦走を試みるオーストラリア隊の2つの大遠征隊が話題を呼んでいる。その他、インドネシアが初めてネパール・ヒマラヤへ登山隊を送り、プモリ（7,161m）に挑む。

プレの日本隊は、上記三国合同隊の他は以下の1隊のみ。

○カンテガ（6,779m）

折尾山岳会カンテガ登山隊（福岡）

村上浩司隊長（32才）ら3名が南西稜に挑む。

《中国》

観光サービス向上へ法検討

中国国家旅游局の向光暉副局長は1月26日の記者会見で、観光事業のサービス向上を目指して、國務院（内閣）で「観光旅行法」の制定を検討中であると語った。

78年に対外開放政策をとり始めてから中国の観光事業は驚異的な伸び率を示してきた。外国人団体客だけみても、年平均伸び率は25%。昨年、中国を訪れた観光局のトップは日本人で578,000人、前年比で94,500人増。外国人観光客総数のほぼ3分の1を占めた。

半面、予約システムが整備されていないため、到着するまでどこへ泊まるのかホテルの名も不明だとか、着いても部屋がなくロビーで一夜を明か

す例や、北京に泊まるはずが隣の天津市や河北省の小都市に回されたなどの苦情も絶えない。国策で禁じているはずなのにチップを要求したり、タクシー運転手が法外な料金を吹っかけたり、と云った例も少なくない。

チベット旅行再開へ

昨年秋に「チベット独立」を要求するラマ僧らの騒乱が起きて以来禁止されていたチベットへの個人による観光旅行は、原則として3月15日から再開されることになった。

チベット対策に誤り 全人代副委員長認める

パンチェン・オルドニ中国全国人民代表大会常務副委員長はこのほどラサで、昨年秋、チベットで起きたラマ僧を中心とした騒乱事件について、少数の分裂主義者の策動とともに、中央の対チベット対策の誤りも原因だったと語った。

これは2月22日上海に着いたチベットの新聞「ラサ晚报」（2月9日付）が一面トップで報じたもので副委員長は「党11期三中総会以後、チベットは各方面で大きく発展したが、（チベットに対する）具体的な対策の中にいくつかの欠点や誤りがあり、大衆はそれに不満を持ち、少数の分裂主義者に扇動の機会を与えることになった」と述べた。この騒乱事件に対し中国指導者はこれまで、独立要求グループを非難する発言を繰り返していた。

副委員長はまた、騒乱の際死亡した6人のうち3人は警察側の発砲で死亡したことを明らかにした。（2月23日読売新聞）

《パキスタン》

冬期K2隊、悪天候下で苦戦

パキスタンの2月9日付「Muslim」紙は、初の冬期K2に挑んでいる国際隊は、敵意剥出しのブリザード、降雪、あられと云った悪天候に前進を阻まれ、頂上攻略迄残すところあと5週間となったと報じた。

同紙によると、2月8日にBCのA・ザヴァダ

隊長と無線機でコンタクトしたところ、ザヴァダ隊長は、「天候はこれ迄にない悪天候で、この悪天が我々の山に於ける唯一の敵である。然し、間もなく登頂のためのチャンスが少しずつ輝いてくるだろうから我々は前進するつもりだ。」と語ったと云う。

1月の第4週にKrzystof Wielicki と Lezcek Cichy の2隊員がC2（6,800m）へのピッチを試みたが、装備と一緒にテントも吹き飛ばされるような強風に阻まれて失敗した。然し、彼らは一担C1に下った後、再度試みてC2を建設した。

この日のレポートでは、現在C3建設が強風の為中断されていると云われる。登山隊の計画ではC4迄建設する予定になっている。

インフォメーション

HAJ盛岡集会のお知らせ

HAJの標記集会が下記の通り開催されます。
記

1. 目的 最近の海外登山の現状と岩手県内の登山隊の報告を行い、今後の海外登山計画をお持ちの方や関心の有る方に正確な情報を提供すると共に、登山の実践の成果を伝達する。
2. 日時 3月27日(日)9:30~15:00
3. 会場 盛岡市内・岩手県民会館第一会議室
(4階) ☎0196-24-1171
4. 参加費 1人 1,000円
5. 申込み 先着50名

6. 主催 日本ヒマラヤ協会

東京集会のお知らせ

3月の東京集会は、下記の通り開催します。

- 日時 3月28日(月)午後7時~
場所 HAJルーム

インド・ヒマラヤ編(10)

インド・ヒマラヤ編の最終回としてインド・ヒマラヤの登山規則（全文和訳）を掲載する。順序から云えば、先ず最初にこの登山規則に目を通すべきかも知れない。

— インド・ヒマラヤ登山規則〈全文和訳〉 —

外国人によるインド・ヒマラヤ登山申請書

（3部提出のこと）

注意事項

(a) 1979年1月9日付インド政府内務省告示No. 11013/4/78-F.I. に交付された外国人規則1948の第11項(a)は、外国人特権令1957の適用を受ける者を含むすべての外国人に対して、個人であろうとグループであろうと、予め中央政府の許可を得ることなくインド国内のいかなる山をも登頂したり試みたりしてはならないとし、そのための申請は、予定ルートの詳細、連絡官の随行、撮影機器や通信機器の使用などについて明記し、インド登山財団 (I.M.F.) で行なうこと、と規定した。

外国人法令の1946の第14節では、さらに次のことを定めている。

「この法令による各規則およびその補則に違反する者は、最高5年の刑に処し、罰金を課するものとする。違反者が第3節 / 第2副節 / 条項(f)の適用を申し立てる場合においても罰金刑を免ぜられることはなく、これに従わないものは法廷で裁きを受けなければならない。」

(b) 記入漏れのある申請書は受理しない。

第 一 部

1. 目標とする山の名前と標高。できればその位置（緯度、経度）も示す。
（希望する山がすでに他の隊に予約されている場合のために、第2、第3希望の山も記すのが望ましい。）
2. 目標とする山のルート概念図。どの面 / 稜を登るかを明記する。（7部提出）
3. 遠征期間とインド入国および出国予定日。
 - 3A. 実際の登山期間（B.C. から頂上、およびB.C. に戻るまで）。
4. メンバーリスト（隊長も含む）（7部提出）
氏名、父親名、住所、年齢、国籍、登山歴、職業、パスポート番号、発行日と発行地、最近親者名と

その住所を列記し、各自パスポート・サイズの写真を貼付する。(申請書の提出時に前項目が用意できなければ、とりあえずメンバーの名前と国籍、パスポート番号と発行日を記入—この場合も7部提出—残りの項目については後日送付する。)

メンバーの中に軍隊あるいは外交団体に所属する者、所属したことのある者がいれば明記すること。

5. 派遣母体名とその所在地
6. インド大使館への「エントリー・ビザ」申請予定日。(「観光ビザ」あるいは「トランジット・ビザ」では、インド・ヒマラヤを目指す登山隊への参加はできない。インド入国後のこれらのビザからの書き換え申請は一般には認められない。)ビザの発給をうけるインド公館名とその場所を記すのが望ましい。
7. ウォークトーカー等の無線通信機器をインド国内に持ち込むか。持ち込む場合には、同封の申請用紙にもれなく記載して添付すること。(3通提出)
8. ラジオ気象通報の手配を希望するか。
9. インド国内に持ち込む登山用具、衣類、食料、その他すべてについて、消耗品と非消耗品に分け、概算重量とC. I. F. 価格(訳注:輸送運賃、保険料等の諸経費を加えた価格)を記載したリストを2部添付すること。

隊長の署名 _____

誓約書

私は誓約します。

- (1) インド国内に持ち込んだものは、山で消費したものあるいは紛失したものを除いて、入国の日から6ヶ月以内に再び国外に持ち出します。
- (2) もし再び国外に持ち出せない場合には、特別の理由がない限り、相応の関税を支払います。
- (3) 私はここに約束します。
 - (a) 私達が訪れる山岳地域のいかなる草花も採ったり傷つけたりしません。また、いかなる樹木も燃やしたりしません。十分な量の灯油か他の燃料を持参します。
 - (b) 隊に同行するポーターについても、上記のことを実行させます。
 - (c) 各キャンプのゴミは燃やしたり地中に埋めるなどして、自然環境を汚さないように徹底させます。
- (4) 緊急時にヘリコプターを要請した場合、その出動費用とその後の入院費用は、請求書のとおり全額をI.M.F.に支払います。
- (5) リエゾン・オフィサーは隊のメンバーとして扱い、装備は私達と同様のものを用意し、食料やポーター等については本人の希望どおりにします。
- (6) 以上、厳守します。
- (7) 報告書は遠征終了後ただちにI.M.F.に提出し、写真類は2ヶ月以内に送ります。

日付:

隊長の署名 _____
(氏名)

第 二 部

外国登山隊への通告

1. 申請書および一連の書類は、本隊のインド到着予定日の少なくとも6ヶ月前に、I. M. F. (住所: Benito Juarez Road, Anand Niketan, New Delhi - 110021) 宛に送付すること。もしインド入国地名と各メンバーの氏名およびパスポート番号が到着予定日の3ヶ月前までに通知されていない場合、登山ビザの発行が遅れ、隊は本国あるいはニュー・デリーで待機しなければならない。
2. 登山隊へのアドバイス
 - (1) 少しでも体調に異常を感じたら、出発前に健康診断を受けること。
 - (2) 隊の中に少なくとも1、2人はヒマラヤでの高所登山経験者を含むこと。
 - (3) ベース・キャンプと各キャンプ間の連絡のため、無線機を用意すること。
 - (4) オール・インド放送局の天気予報を受信するためのラジオを用意すること。困難な山を目指す隊は特に重要である。放送の手配はI. M. F. へ要請する。
 - (5) 小冊子“WHILE IN THE HIMALAYAS, Dos & Dont's” (邦題: 「ヒマラヤ登山、するべきこととするべきでないこと」、日本ヒマラヤ協会刊) を読んでおくこと。これはI. M. F. オフィスにて一部4ルピーで手に入る。

3. すべての外国登山隊にはインド人登山家のリエゾン・オフィサーが同行する。リエゾン・オフィサーは隊の一員としての扱いを受け、他のメンバーと同程度の次のとおりの装備、衣類を隊から支給されるものとする。

(a) 登山靴 (スパッツも)	1 足
(b) クランポン (アイゼン)	1 足
(c) アイス・アックス (ピッケル)	1 本
(d) 防風衣	1 着
(e) 羽毛服	1 着
(f) 寝袋	1
(g) エアー・マットレス	1
(h) ルック・サック	1
(i) ストック	1 本

その他、登山用ハーネス、登行器 (ユマール等)、水筒、ナイフ、帽子など、メンバーが必要とする装備はすべてリエゾン・オフィサーにも支給すること。これらのリエゾン・オフィサー用装備は、山へ出発する前にニュー・デリーで手渡し、必要であれば隊の団体装備とは別に梱包する。アイス・アックス、クランポン、登行器、寝袋などの装備は、遠征終了後隊に返却される。その他ジャケットやズボン、手袋、靴下等の個人衣類や靴などは、そのままリエゾン・オフィサーに与えてもよい。もしリエゾン・オフィサーの装備が用意されなかったり、他のメンバーのものより劣るようであれば、隊の出発は認められない。デリー出発から帰着までの、リエゾン・オフィサーの交通費、食事代、宿泊費、コックおよびキャラバンのポーター賃金などは隊が負担する。(これらは6週間で約2,500ルピーである。) 食事と宿泊も他のメンバーと同程度とする。自国からの食料を携行する場合、ほとんどのインド人リエゾン・オフィサーは牛肉を好まないのもので、その代わりになるものを用意しなければならない。遠征期間中のリエゾン・オフィサーの給料はインドでの彼らの雇い主によって支払われ、居

住地からニュー・デリーまでの往復交通費も隊が負担する必要はない。

4. 各登山隊は、目標とする山の位置する場所が制限地域かオープン地域かを問わず、リエゾン・オフィサー1名の同行が義務づけられている。もし、登山隊のメンバーが何月何日に、どのようにしてニュー・デリーに到着するか、入国の2ヶ月前までに通知されていない場合、ふつう地方からやってくるリエゾン・オフィサーを待つために、隊のデリー出発が遅れることがある。
5. リエゾン・オフィサーは、ポーターやミュールの雇用、道中の宿の手配、デリーからキャラバン開始地までの輸送機関の手配、登山中にメンバーが病気や事故に遭った場合の地方住民や軍幹部および I. M. F. との連絡の維持、などに協力して隊を助ける。さらに、同行したリエゾン・オフィサーに登山経験があり、能力が伴っていれば、上部キャンプあるいは頂上まで登らせてもよい。また、キャラバンでは10-15kgの荷物を背負わせてもよい。
6. ガルワール、ヒマチャル・プラディッシュ、ジャムー&カシミールの各地区に到着したら、隊長とリエゾン・オフィサーは、その地区の行政責任者（地区行政長官あるいは長官代理）に報告しなければならない。登山隊はポーターと直接交渉をしないよう忠告を受け、地区行政当局が規定料金でのポーター雇用の便宜を計る。
7. 登山隊からの申請を受けるとすぐに、I. M. F. は、その山が既に予約済みでなければ、仮予約の登録をして隊に連絡する。（登山のためにはインド政府発行の許可証が必要であり、この許可証を得るために I. M. F. を窓口として必要事項をすべて記入した申請書および一連の書類を提出する。）隊は仮予約の知らせを受け次第、次のとおりの登山料を正式申請書と共に送らなければならない。

山の標高	登山料金
6,000 m以下	400 US ドル
6,001 m～6,500 m	600 US ドル
6,501 m～7,000 m	900 US ドル
7,001 m以上	1,200 US ドル
カシミール、ヌン峰・クン峰	1,500 US ドル
カラコルムの山々	2,000 US ドル

登山料の支払いはUSドルに限られ、I. M. F. を受取人とした、ニュー・デリーにある銀行宛為替手形とする。

I. M. F. が隊へ連絡してから2ヶ月以内に登山料が支払われない場合、仮予約は取り消され、その山は次の隊へまわされる。登山料の送金はI. M. F. を受取人としたニュー・デリーの銀行宛為替手形とする。小切手は受け付けない。予約登録後に遠征を取り消した場合には、登山料の25%を徴収する。

予約した以外の山は、たとえ高所順応のためであっても登ることは許されない。

もし許可を得た山での登山活動中あるいは登頂後、さらに第二の山に登ることを希望するならば、その山に他の隊が入っていないことを確認したうえでリエゾン・オフィサーが登山を許可する。この場合、第二の山の登山料は規定の50%でよいが、その登山期間は45日以内でなければならない。

8. ポーターあるいは高所ポーターが死亡した場合、隊は補償金としてそれぞれのポーターに対して10,000 ルピーあるいは 15,000 ルピーを支払う。負傷の場合の補償は、隊長との話し合いにより、I. M. F. が決定する。登山隊はインド到着後、ポーター、特に高所ポーターに対して、死亡と障害の両方に通用し、少額掛け金ですむ保険を掛けておかれたい。
9. リエゾン・オフィサーは、入山前に I. M. F. により 100,000 ルピーの保険が掛けられる。登山隊メンバーは各自本国で保険に加入しておかれたい。
10. 山で事故が発生した場合、負傷者はヘリコプターによって最寄りの病院に運ばれる。この時の費用は、フライト時間などによるが、一回のヘリコプター出動に対して 25,000 ルピーあるいはそれ以上かかる。これは登山隊の負担となるので、各メンバーは事故の危険をもカバーする保険に加入しておかれない。
11. 遠征終了後、所定の様式による詳しい報告書を（写真類とルート図を添えて）I. M. F. へ提出すること。これは特に、何人のポーターを雇用したか、彼らを何処から集めたか、一人一日あたりいくら支給したか、彼らや他のインド人を雇う際に問題はなかったか、などについて報告することになっている。
12. 私は上記の通告に目を通しました。各項目に従うことを約束します。

隊長の署名

(氏名)

場所：

日付：

To
The Honorary Secretary,
Indian Mountaineering Foundation,
Headquarters Complex,
Near Ram Lal Anand College,
Benito Juarez Road, Anand Niketan,
New Delhi - 110021 - INDIA

FESTIVAL OF INDIA

JAPAN 1988

ヴィスタラ — インド建築展

1988年11月15日～12月25日

世田谷美術館（東京）

数世紀にまたがるインドの建築を紹介するこの展覧会、ヴィスタラは、重要な建築物を単に歴史を追った年代記風のドキュメントとして紹介するものではなく、インド建築の性格や背景も理解できるように試みられています。年代に従って変化に富む建築に接すると、ヴェーダ時代から今日に至るまでの建築がそれぞれ、神話的なものが基調として表現されていることがわかります。時代が進むにつれ、神話も変化し、この変化が起こるたびに新しい領域、つまりヴィスタラが姿を現わします。インド建築の歴史はかかるヴィスタラの途方もない発展の歴史であります。

本展覧会はインド建築の最も特徴的な例を、神話的なテーマを強調しつつ、六つの部門に分けて紹介します。

マンダラ：ヴェーダ期の予言者にとって建築の機能は、宇宙の模型を創造し、現象的な世界を秩序づけることにあり、神聖な幾何学を基礎とするマンダラが、無限の応用と脚色の可能性を持つものとして、家屋や宮殿、寺院、さらには町や都市のマスタープランを作る上で利用されました。

本展覧会の第一部では、サンチの仏捨利塔とグジャラート州モデーラの太陽神を祭った寺院が展示されます。

マヌシュ（人間）：人間と環境、人間が自分を取り囲む環境の長所と短所に順応しようとする能力。これが第二部のテーマです。カッチ湿地帯に位置するバンニ地方の村落、ラジャスタン州の砂漠の都市ジャイサルメール、アーメダバードの石柱、アッサム地方の竹の家、ボンベイのにぎやかな住宅地域などを紹介することにより、人間の居住地を創り出す遠大な根源が浮き彫りにされます。

マンタナ（攪拌）：インドは長い歴史を通じて、外部からの影響を攪拌し、それを同化し、変容させるという独自の能力を発揮してきました。これが第三部のタイトル・マンタナ（「攪拌」）が意味するところです。第三部では、ファテプル・シークリーのディワネ・カース（貴賓謁見の間）、グッリオール近郊のダティア城、ラナクプールのジャイナ教寺院、トリバンドラムのパドマナバプーラム宮殿およびジャイプールの都市計画がマンタナの重要な例として紹介されます。

地下構造物：もし寺院が宇宙の模型であるとするなら、地下建築物は宇宙の解体の模型とも考えられます。

第四部の展示物の一つに、アーメダバードの階段式井戸、ダイ・ハリールが挙げられます。

イスラム：ムガル王朝はインドに二重軸対称の原理に基づく建築方式をもたらしました。

この部門では、比類のない壮大な回教建築物の例としてフマユーン王の墓が紹介されます。

植民地時代：ヨーロッパから植民地主義者がインドに到来するとともに、合理性、工業化、近代化という新しい価値感がインドに生まれました。この部門では、植民地時代の建築物の代表として、宮舎とバンガローが展示されます。

本展覧会では、有名な写真家が25の史蹟と40の現代建築を撮影した2,000枚以上の写真が展示される他、実測図、縮尺模型、スケッチ、鳥瞰図、アーチファクトを含め、建物の内部、イスラム風の部屋、植民地風のベランダなども復元し展示されます。

この他に本展覧会の会場では、16,000枚のスライドから成る視聴覚番組（45分）が上映されます。映像、音楽、サウンドを総合的に組み合わせる構成される本展覧会は、ヴィスタラの本質を適確に捉えようとするものです。ヴィスタラ展は、日本建築学会の協力で開催されます。

インド映画祭

インドは長編劇映画を毎年700本以上も産む世界最大の映画製作国です。フランスで映画が発明されて数ヶ月後にあたる1896年に、インドに映画が初めて紹介されました。それ以来、映画はインドで最もポピュラーな娯楽であり、芸術の一角を形成してきました。インドの映画産業は、映画を多くの言語で作る旺盛な生産力を持ち、バラエティーに富む巨大な産業となっています。

インド映画祭では、日本の映画ファンに対し、人気の高い大衆向けの映画と、芸術性、社会性に富むシリアスな映画の両方を紹介するという観点から、有名な監督の作品を含む25本の映画が上映される予定です。興味深いことは、この映画祭のために選ばれた作品が、50年にも及ぶ長い期間にわたっていることであり、また、伝統的にしばらくも近代化への新しい価値観に適応しようとするインド社会の問題を扱うインド映画の力強さを日本の映画ファンに披露できることです。

今回日本で上映される劇映画は五つの部門に分けて選定されました。「インド映画史」の部門では、フェニ・マジュムダール監督の「ストリート・シンガー」、ビマル・ロイ監督の「2エーカーの土地」、グル・ダット監督の「渇き」など、過去の偉大な監督による古典的な作品が中心となっています。次に「娯楽映画」の部門では二つのヒット作、即ちラメーシュ・シッピー監督のヒンディー語の大作「炎」、パール・マヘンドル監督のタミル語の名作「ムンドラム・ピライ」をお目にかけます。「ニュー・シネマの系譜」の部門では、サタジット・レイ、リトウィック・ガタク、アドゥール・ゴーパーラクリシュナン、アラヴィンダン等の巨匠が追求した新しい方向を示す作品として、「音楽ホール」、「雲のかげ星宿る」、「ねずみとり」、「チダンバラム」などが紹介されます。さらに、「インドの女性映画」の部門では、インドに生きる女性に焦点があてられた映画として、バーラチャンドル監督のタミル語映画「お水よ、お水」、今は亡き女優スミター・パーティル主演の名作の一つであるジャッパル・パテール監督のマラーティ語の映画「門出」、プレーマー・カラ

ント監督のカンナダ語の映画「フェニおばさん」等が上映されます。第五部「若手監督」では、ゴータム・ゴース監督の「渡河」、スディール・ミシュラ監督の「青春の終着点」等が紹介されます。本インド映画祭は「ぴあ」と協力で全国各地で行われます。

(なお、ここに紹介されたインド映画の日本語タイトルは仮訳であり、正式なタイトルではありません。)

インド近代美術展

町田市立国際版画美術館 (東京)

目黒区美術館 (東京)

(日程は未定)

今世紀におけるインドの芸術家は、インドの伝統美術が持つ魅力と西欧の現代文化にはさまれて、何れに組するかを選択のジレンマに直面しています。このような環境の下で、インドの芸術家は古いものと新しいものとの均衡を打破することを余儀なくされました。インドの現代美術は、このように芸術家が独自のビジョンを確立しようと闘った結果を物語るものです。

これが本美術展の基本的な考え方であります。この展覧会で紹介される約30人の芸術家の作品(絵画、彫刻、レリーフなど)は、インドの民族精神や心像に根ざしており、同時に近代的な技巧と今日的なセンスをも兼ね備えています。ここには様々な感性と人に訴える力が満ちあふれています。先にニューデリーで開催されたトリエンナー



▲カタク・ダンス (PHOTO:アビナシュ・パスリチャ)

レ美術展で受賞した新鋭画家プシュパマーラの作品や、M.F. フェインのような確立した芸術家の作品も展示されます。

インドの風景は輝かしい色彩にあふれています。このため、インドの画家には、ムードを具象化したり絵画的な動きを創造するために色彩に重点を置く傾向が強く、従ってインド人画家の特徴が色彩にあるとしても何ら不思議ではありません。インドの美術は大きく分けて次の三つのテーマに分類できます。即ち、第一に象徴的でニュアンスに富む具象芸術を、第二にネオ・タントラ芸術に象徴される広大で生産的なエネルギーを表現する芸術を、第三に表面は抽象芸術ではあるが、自然や風景と深い関わりを持つ芸術を挙げることができます。更に、絵画のスタイルは具象的なもの、半ば具象的なもの、抽象的なもの、ネオ・タントラなものに分類することができ、これらすべてのスタイルが本展覧会で紹介されます。

数多くの出品物の中で、M.F. フェイン、クリシェン・カンナ、タイヤブ・メータ、ジョゲン・チョウドリー、マンジット・パワ、ピラジ・サーガラの作品が特に注目されます。

プシュパマーラとムリナリニ・ムケルジーの二人の芸術家がテラコッタ、縄、麻などを用いて創作した作品や、ナグジ・バテルの男根を思わせる形の石の彫刻なども展示されます。ネオ・タントラ芸術の洗練された書のすばらしさは、G. R. サントシュやビレン・デーの作品にみることができ、画家ラム・クマールやV. S. ガイトンデは、追憶の中に存在する経験と自然を感覚的にとらえることを作品のテーマとしています。

この展覧会では、現在活躍している芸術家30名がそれぞれ五つの作品を展示し、その才能と現代インド芸術の姿が披露されます。

写真展「インド・祭り」

沖守弘氏は、インド各地の写真を撮り続けることで有名な写真家であり、インドの祭りをテーマとする写真展をインド祭の一環として催します。この写真展では、沖氏がこれまでに撮った60,000点以上の作品の中から、インド各地における様々な祭りに焦点をあてて選ばれた200点近い作品が

展示されます。

ミティーラ壁画展

1988年4月29日～6月5日

たばこと塩の博物館（東京）

ミティーラは3,000年にも及ぶ長い伝統を持つインドの壁画であります。ビハール州北部とネパールの高原地帯は昔からミティーラと呼ばれており、この地域はインドの神話、思想、文化にとって重要な役割を果たしてきました。今回のミティーラ壁画展は、日本で最も多くのミティーラのコレクションを持つ長谷川時夫氏の協力により、東京の他、全国各地でも開催されます。

インド料理フェア

インド祭の期間中に、東京と大阪でインド料理フェアが開催されます。詳細については現在計画中です。

メラー

メラー（インドのフェア）が二日間にわたって、東京の上野公園で行われます。インドから民芸家、民俗音楽家、伝統工芸家などがこれに参加し、メラーを一層楽しいものに盛り上げます。また、当日は都内のインドレストランの協力によってインド料理の屋台が用意され、御来場の皆さまにすばらしいインド料理を味わっていただきます。

インド史劇「マハーバーラタ」

先にフランスのアヴィニオンで大成功を収めたピーター・ブルック監督によるインド史劇「マハーバーラタ」が、インド祭の一環として西武セゾン劇場で上演されます。



▲カタク・ダンス (PHOTO:アビナシュ・パシリチャ)

■ 寸 感 ■

1月下旬にUIAA遠征委員会に出席するためにアルプスの麓、シャモニーを訪れた。今正月の暖冬異変はアルプスの谷でも同様のようで、アルプス滞在が早16年にも及ぶと云う日本人グループの人達も一様に驚かれていた。

遠征委員会は2日間に亘ってフランス国立登山スキー学校(Ecole Nationale de Ski et d'Alpinisme)で開催された。通称ENSAと呼ばれるこの施設はシャモニーのほぼ中心地に位置し、その独特な建造物は恰もアルプスの谷のシンボルのように建っている。

日本の山に比べて山塊構造の険しいアルプスでは、山岳ガイドが特殊技能者として認容され、国が厳しい国家試験でプロ・ガイドを認定している。こうした土壌の中では登山も陽の当る市民権を得ているようである。それに引替え我が国の登山に対する社会の風当りはどうであろうか……。

事 務 局 日 誌 (2月)

- 1日(月) 新青峰集会
- 2日(火) GⅡ峰集会
- 8日(月) リモ峰集会
- 9日(火) リモ隊ビザ申請、インド政府観光局往訪
ゲニ峰集会

— 事務局から —

昭和63年度分会費納入のお願い

本会の年会費(6,000円)は、前納制となっております。昭和63年度分(昭和63年4月1日～昭和64年3月31日)の年会費がまだの方は、速かにご納入下さいますようお願いいたします。

6月30日まで納入なき場合は、「ヒマラヤ」に「前金切れ」の表示をして督促しますが、それでも納入されない場合は、会費が納入されるまで「ヒマラヤ」の発送を停止させていただきます。

尚、終身会員制度もありますので、詳しくは事務局迄お問い合わせ下さい。

郵便振替 東京0-48954 日本ヒマラヤ協会

- 10日(水) 新青峰集会
- 12日(金) 事務局打合わせ(稲田、山森)
ヒマラヤNo.196発送
- 13日(土) 群馬県岳連合同追悼・報告会(前橋)
宇都宮白峰会登山隊報告会(宇都宮)
- 15日(月) 新青峰集会
- 16日(火) 冬期K2集会
- 18日(木) リモ峰集会
- 20日(土)～21日(日) 第26回海外登山技術研究会(山森、尾形)
- 22日(月) 新青峰集会、リモ峰集会
- 27日(土) '88H A J 4隊打合わせ会
- 29日(月) 東京集会(22名)

ヒマラヤNo.197 (4月号)

昭和63年3月10日印刷 63年4月1日発行

発行人 遠藤 登
編集人 尾形 好雄
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

— 神の山、ゲニ峰 —

1987年夏の記録、刊行

1987年7月～8月にかけて13名から成るH A J 隊は、中国四川省の知られざる海子山塊のゲニ峰(6,204m)初登頂を目指したが、生憎と悪天候に阻まれ、登頂は断念となった。88年の再挑戦を前に此の度、同隊の報告書が上梓された。気象衛星「ひまわり」からの気象報告が有り、知られざる山塊の参考になる。

B5版 74ページ、口絵モノクロ写真3ページ、本文モノクロ写真多数。

(頒 価) 1,000円(送料200円)

(申込み先) 日本ヒマラヤ協会事務局まで

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号

カラコルムの秀峰 ウルタル山



遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

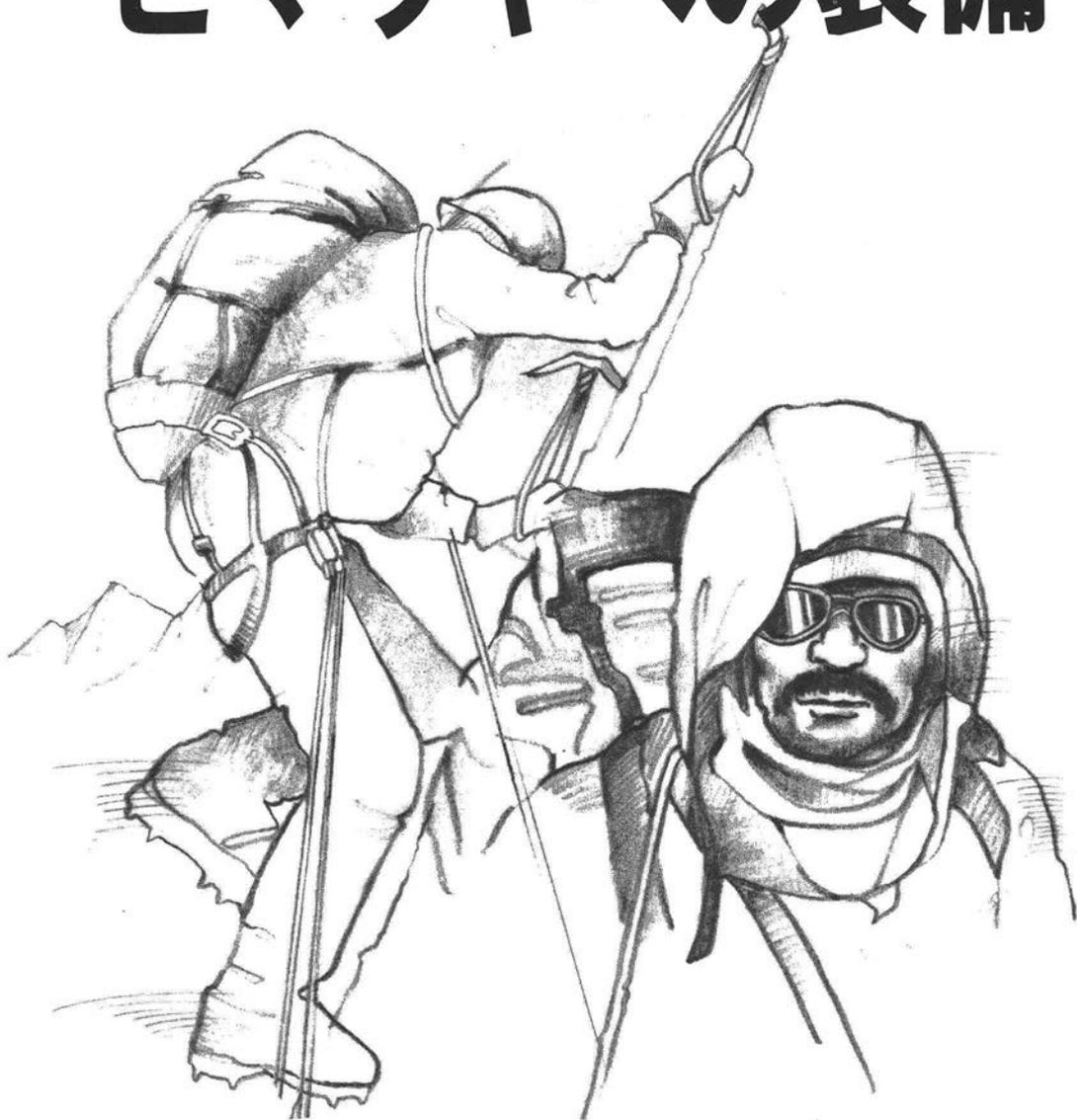
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160 東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03 (208) 6601~3
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486 (41) 5707
- 水道橋登山店 / 〒101 東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03 (264) 5575~6
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03 (295) 0622
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03 (346) 0301(代)
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町6番地 ☎0273 (27) 2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060 北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011 (222) 5305
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252 (43) 6330
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222 (97) 2442
- 町田ジュルナ店 / 〒194 東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427 (26) 6248(代)
- フーズショップ / 〒160 東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03 (232) 1286
- 外商部 / 〒160 東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03 (200) 7219
- 事務所 / 〒160 東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03 (200) 1004